

令和7年度 第2回学校運営協議会

1 日 時 令和7年9月12日（金）午後3時から4時30分まで

2 場 所 静岡県立掛川西高等学校 大会議室

3 次 第

(1) 校長挨拶

(2) 議事

- ・カリキュラムポリシー等の検討について
- ・7月アンケート結果について

(3) その他

4 出席者

学校運営協議会委員（敬称略）

井上 美千子	しずおか共育ネット 代表理事	5年目
岡田 智行	掛川市立北中学校 校長	2年目
瀬畠 義孝	静岡新聞社掛川支局 支局長(人事異動により8/1着任)	1年目
石山 基和	掛川市役所企画政策部 企画政策課長	1年目
小澤 哲夫	静岡理工科大学 統括副学長	2年目
相場 啓嗣	掛川西高等学校PTA会長	1年目

※ 年数は、学校評議員の年数も含む

本校職員

大石 正佳(数)	校長
岡野 哲也(理)	副校長
吉野 友三(保体)	教頭
小嶋 唯起子	事務長
大橋 雅則(数)	教務主任
松浦 弘季(数)	生徒指導主事
大村 生実(国)	進路指導主事
青木 紀文(国)	研修主任
佐野 正裕(数)	3学年主任
土屋 翔一郎(保体)	2学年主任
楠屋 真行(保体)	1学年主任

令和7年度第2回学校運営協議会・議事録

井上：議事の1、カリキュラムポリシー等の検討について校長から説明がある。

校長：カリキュラムポリシー等の検討についての現状を説明。

井上：カリキュラムポリシー等の検討について質問・意見を伺いたい。

井上：グラデュエーションポリシーの「失敗をしてもそれを生かして挑戦しようとする」の表現を変更した理由を伺いたい。また、新しい学習指導要領では「自己決定・自己選択」がキーワードだと感じているが、その点は反映されているのか。

校長：「失敗をしてもそれを生かして挑戦しようとする」は最終案の「目標に向かいその結果を次に活かそうとする」という表現に含まれる。「自己決定・自己選択」は「主体性」の「自分事として考えられるか」に含まれる。意見を参考にブラッシュアップしていく。

小澤：グラデュエーションポリシーの生徒への浸透度、3ポリシーの連動性、および目標達成度を測る評価指標について知りたい。

校長：生徒に分かりやすいようにポンチ絵にして教室に掲示している。評価指標は検討チーム内でも測定が難しいという課題意識があり、今後も検討していく。

岡田：グラデュエーションポリシーで項目を精選したことは評価したい、生徒たちの意見を目標に取り入れてもよいのではないか。

校長：生徒の意見を取り入れる点は検討したい。

石山：掛川市では、高校生に地元に戻ってきてもらえる街づくりを目指し、DEI(多様性・公平性・包括性)を重視している。グラデュエーションポリシーの「自己有用感」にこの3つが含まれている。掛川市の街づくりのビジョンとも重なっていてうれしく思う。

校長：多様性はこれからの時代において重要な視点であると考えており、生徒たちにも伝えていきたい。

瀬島：グラデュエーションポリシーの「主体性」の中の「失敗をしてもそれを生かして挑戦しようとする」という姿勢は社会で社会を生きていく上で重要な要素である。項目を削減し、精選していく狙いも理解できるが、この表現は残してもよいのではないかと感じる。

校長：今後の検討の際に、参考にさせていただく。

相場：グラデュエーションポリシーの「創造性」の「未来志向をもちながら、現在の凡事を徹底しようとする」を「未来志向をもちながら、成長し続けようとする」に変更した理由を伺いたい。

校長：「凡事を徹底」という表現は「主体性」の項目に移行し、「創造性」では、「未来志向をもちながら、成長し続けようとする」という表現に変更した。

井上：委員からの意見を参考に、今後も学校側で検討していくことを確認。

井上：議事の2、7月のアンケート結果について教頭から説明がある。

教頭：教頭、各課長、学年主任からアンケートの分析について説明。

井上：7月のアンケート結果について質問・意見を伺いたい。

瀬島：1年生のアンケートにおいて「そう思う」と答える生徒の数が低い。「ややそう思う」と合わせると6～7割を超えているが、「そう思う」と答える生徒の数が低い理由について何か思い当たることはあるか伺いたい。

校長：明確な理由はわからない。学校に慣れてきているのかという点が問われてくるが、「私は先生に認められている」という質問項目に対しては高い数字が出ている。その安心感から、この数字がどのように変わっていくか注視していきたい。

副校長：2年生との面談の際、高校に入ってから、授業の内容を授業内で完璧に理解することが難しくなると答える生徒がかなり多かった。今年の1年生もその点で苦勞しているのかもしれない。

瀬島：高1ギャップということかもしれないが、授業についていかなければならないという意識が高いともいえる。生徒が謙遜して「ややそう思う」を選んでいることも考えられ、あまりネガティブに考える必要はないように感じた。

井上：高校に入って、勉強に苦勞する生徒の数は進学校では多いと感じる。その中で、自己有用感是非常に大切だと感じる。生徒が勉強で苦勞していても、自分には良さがあると思えるような雰囲気作りが大切だと感じる。

石山：他校でもこのようなアンケートはやっているのか、アンケートの質問項目は同じなのか。

校長：各校で学校評価のためのアンケートは実施しているが、学校独自のものが多い。

石山：目標値は各学年によって違うのか

副校長：年度当初に学年主任が決めるが、大きな差があることはない。

石山：学年ごとの比較だけでなく、同じ対象者の経年変化という視点で見てもよいのではないか。

相場：肯定的な回答の選択肢には、「そう思う」と「ややそう思う」があるが、学校としては「そう思う」と答える生徒を増やしていくことを目指していくのか伺いたい。

副校長：「そう思う」と答える生徒を増やしていくことを目指していきたいと考えている。

小澤：多くのアンケート項目において、80～90%以上の肯定的な意見があり、学校としては良い方向へと進んでおり、成果を出しているのではないか。今後は学校の課題に対してアンケートをとり、課題をクリアにするようなものへと進化させていくことも必要に感じる。

校長：今後に向けてのヒントをいただくことができた。

岡田：教職員アンケートにおいて、学習内容や指導方法について周りの先生方と話し合ったり共有したりしている教員が多いことがわかり、素晴らしいと感じた。

中学の部活動が大きく変化しており、ほとんど活動してこなかった生徒が入学している。部活動の時間が長いといったクレームのようなものは出ていないか。

楠屋(1年主任)：一部の部活ではあるかもしれないが、むしろ、中学校であまりできなかった部活動が高校では思う存分できるというような前向きな考え方でとらえている生徒が多く感じる。

岡田：中学校の部活の流れは止められないので、今後も連携を取りながらお願いしたい。

井上：本日は、貴重な御意見ありがとうございました。

以上